

新美南吉「権狐」と水利権争い

——『半田町史』に物語前史をたどる

有田 和臣

序

一 事件は常に「背戸」で起こる

——「権狐」は悲劇を予感させる場所に立つ

二 「権狐」前史に遡及する

——天保と安政に鍵がある

三 矢勝川をめぐる攻防

——治水問題と岩滑・阿久比の歴史的確執

四 明治期の大騒動

——決定的衝突とその後の泥仕合

結

前稿に続き、新美南吉の元原稿と思われる「権狐」成立の背景として、南吉の生家のある岩滑を中心とする地区に存在した水利・治水争いを検証する。「権狐」の物語世界が成立するまでの前史として、幕末より延々と続く、泥仕合の連続といってもよいような紛議の歴史があつた。その歴史が「権狐」の世界観に連続し、映し込まれていると考えられる。その事実を踏まえて読めば、「権狐」の事件設定や無駄と思われるような記述が、この地方の歴史を担った色彩を帯びていること、言い換えれば岩滑の歴史へのメッセージ性を秘めていることを読み取ることができるだろう。

序

先に発表した稿^{〔1〕}で、論者は以下四点の趣旨を述べた。

一、「権狐」の舞台は幕末である。兵十がもっていた火縄銃は「四季打ち鉄砲」と呼ばれる、農地拡大とそれに伴う害獣駆除のために領主が農民に所持を許可してきた鉄砲だと考えられる。農民と害獣の長きにわたるせめぎあいと厳しい敵対関係を考えれば、害獣を見た農民がすぐ撃つて当然である。

二、ごん狐の棲むと思われる権現山（五郷社の森）は領主が管理する「御林^{おや}」に準ずるもので「中山様」の保護下にある。江戸末期には御林に害獣が棲みつき畑を荒らす例が多かったので、農民に鉄砲を許可し農地拡大と害獣駆除を奨励した中山様に、一方でごん狐が間接的に保護されていたということが出来る。農民（兵十）と害獣（ごん狐）との対立の背後に中山様がいる。

三、「権狐」が語られた「若衆倉^{わかしゅぐら}」（宝蔵倉）前の広場は八幡社の境内であり、中山様の城（岩滑城）の御膝元である。加えて中山様が元の神明社境内に強引に八幡社を建立した場所でもある。南吉はこれが地域の争いの原因だと意識していたらしいので、紛議を暗示する場所となっている。四、兵十が鰻を獲る背戸川（矢勝川^{やちがわ}）はこの地域住民の水

利争いの元であった。また五郷社と八幡社境内の神明社とは、それぞれの祭神が神話の中で対立するスサノオとアマテラスであり、これも紛議を暗示している。以上すべての特質に基づけば、「権狐」は対立する者同士の間に起こる悲劇を背景として発想された物語だと考えられる。

本稿では、南吉が憂慮していたという岩滑^{やなべ}の地元民たちの争いが主として右の第四であげたこの地域の水利争いを指すであろうという論者の主張をさらに検証し、その裏付けを試みる。この物語がどのような背景のもとに構想されたのかを検討する目的のため、『赤い鳥^{あかいとり}』掲載の「ごん狐」ではなく、南吉のノートに残された「権狐」を主たる対象とする。

これによって、「権狐」が元来もっていた豊かな地方色が、この作品がもつ悲劇性に生々しい色彩を与えるはずのものであったこと、すなわちこの地方がもつ負の歴史的实力への強い想起力を与えられるはずのものであったことを確認できるだろう。

なお、南吉が残した「スパルタノート」に書かれた作品「権狐」は狐の名も「権狐」と表記しており、これでは作品名と狐の名の区別がつきにくいいため、後者を「ごん狐」（カギカッコなし）と表記して両者を区別することにする。『赤い鳥』版作品名に言及する際はカギカッコつき

の「ごん狐」とする。

一 事件は常に「背戸」で起こる

——ごん狐は悲劇を予感させる場所に立つ

「権狐」の重要な舞台となった「背戸川」は、作者である新美南吉の生まれ育った岩滑（現・半田市岩滑中町）と、その北側に接する阿久比（現・知多郡阿久比町）との境に流れる「矢勝川」のことだと考えられている。矢勝川は「岩滑の北（背戸の方）を流れるため、当地の人たちは背戸川と呼^③んでいたという。南吉がこの慣用的な呼称を採用したのはなぜだろうか。

虚構性・一般性を高めるために地名など実在の固有名詞を避けるのは物語記述の一般的な傾向だということもできる。確かに「権狐」では他にも、「宝蔵倉」という固有名詞を「若衆倉（わかしゅぐら）」という地元民の慣用的な呼称に呼びかえたりもしている。しかしそれだけではなく、「背戸」という呼称が特に必要だったためではないか。

「背戸」は「権狐」の中で、物語進行の要所要所に繰り返し現れる。それらは、偶然とはいえない頻度で現れるので、意図的に繰り返し返され、象徴的な意味を担っていると考えたほうが自然である。とりわけ「背戸川」という呼称が岩滑から見た「背戸」（裏手）、すなわち北側にあたる阿久比と

の位置関係を想起させ、この物語の全体が、阿久比と岩滑との歴史的な敵対関係を暗示する効果を高めていると考えられる。以下に「背戸」の用例を見ていく。

「権狐」は導入部と、番号のふられた五つの節との、計六つのパートからなっている。導入部は、語り手が「茂助爺」からこの物語を語り聞かされた経緯を述べ、第一節以降を物語本編とする。五節からなる物語本編を見渡してみると、事件が動く際、ごん狐が常に「背戸」に立っていることがわかる。また本編で唯一「背戸」の語が見られない第四節には「中山様」が二度登場する。「背戸」と「中山様」が交代で現れるような観を呈しており、両者のつながりも暗示されているようである。これらを確認しつつ各節の具体例を見る。

第一節は、ごん狐が悪戯で兵十の獲った鰻を盗む話である。まず「中山から少し離れた山の中」に棲む「一人ぼっちの小さな狐」が、「百姓屋の背戸」につるしてある唐辛子をとつて来（傍線論者、以下同）るなど「悪戯ばかり」する狐として紹介される。さらに次のような記述が続く。

権狐は、背戸川の堤に来ました。ちがやの穂には、まだ雨のしづくがついて、光つてゐました。背戸川はいつも水の少ない川ですが、二三日の雨で、水がどつと増してゐました。黄く濁つた水が、いつもは水につかつ

てゐない所の芒や、萩の木を横に倒しながら、どんどん川下へ流れて行きました。

右「背戸川」が阿久比と岩滑の紛争の元であつたことは前稿に述べたとおりである。さらに後述するように、その紛争は大雨が降つた際の増水、およびしばしばそれに伴つて起こる水害と、密接な関係をもつものなので、「いつもは水につかつてゐない所の芒や、萩の木を横に倒」すほどの増水は、阿久比、岩滑の両村民にとつて、農作物への甚大な被害、およびそれに伴う両村の紛争を想起させる不吉な暗示をもつ情景だつた（本稿第二節以下参照）。

ごん狐の棲むと思われる権現山（五郷社）の森は背戸川北側の川辺近くにある。するとごん狐が背戸川に近づく行為は、阿久比から岩滑の背戸（裏手）に近づく行為である。「百姓屋の背戸」で悪戯を繰り返すごん狐が背戸川に近づくとき、岩滑の人間（とりわけ兵十）と紛争を起こすであろうことはすでに暗示されていたといつてよい。

第二節で、ごん狐は兵十の母の死を知り、兵十が母親のために獲つたと思われる鰻を盗んだ自分の悪戯を後悔する。悪戯から「十日程た」つた日、「権狐が、彌助と云ふお百姓の家の背戸を通りかゝると、その無花果の木のかげで、彌助の妻が、おはぐろで歯を黒く染めてゐ」た。また「鍛冶屋の新兵エの家の背戸を通ると、新兵エの妻が、髪を梳

つてゐ」た。これらは兵十の母親の葬儀の準備だとわかり、ごん狐は悪戯を反省するのである。ここでもごん狐が「背戸」から岩滑の村民に近づく、事件が新展開を見せている。

第三節で、兵十が自分と「同じ様に一人ぼっちだ」と思つたごん狐は罪滅ぼしを試みる。一度目は鰻売りから「五六匹の鰻」を盗み、それを「兵十の家の背戸口から、家の中へ投げこ」む。しかし「次の日」、「山へ行つて、栗の実を拾つて来」たごん狐が「兵十の家へ行」き、「背戸口から覗いて見る」と、鰻を盗んだと誤解されたい兵十が頬に傷を負っているのを見る。再び後悔したごん狐は、以後、「栗」のほか「きのこや、薪」を贈り続け、「もう悪戯をしなくなる。罪滅ぼしをするごん狐が常に、「背戸口」からアプローチしていることがわかる。

ところで、「きのこや、薪」をどこでとってきたかといえば、ごん狐が棲むと思われる五郷社の森がまず考えられる。前稿で述べたように、江戸末期に近づくにつれての全国の山林の荒れ、枯渇傾向は、知多半島においても例外ではなかつた。武井弘一が『鉄砲を手放さなかつた百姓たち』⁽⁴⁾で指摘する通り、木材の伐採業者が所定本数の伐採許可を取り、実際には大量の材木を伐り出して役人には賄賂を渡しておく、といった行為が横行していた事実を、『半

田町史』も記述している。⁽⁵⁾

この結果「竟に山相一変し以て維新の時に至れり」(『半田町史』一九七頁)といった状況をまねき、雑木が生い茂っているのは、幕府が管理能力を失い放置されている御林ばかりだったという。ただし狭義の御林は幕府勘定奉行の所管または御林奉行の支配に属する「公儀林」なので、全国諸藩に存在する同種の私領山林では「あえて御林の称呼を避」ける場合が多かったというから、五郷社の境内山林などは「領主管轄の山林」と言っておくのがよいだろう。

ここでは農民による勝手な入山や薪の採取が禁じられていた(「若干の年貢を納めて落葉、下草を採集する」ことを許可する場合もあった⁽⁷⁾)ので、ごん狐がとってきた「栗」や「きのこ、や、薪」は、当時の農民にとって貴重なものだったと考えられる。ごん狐は自分の出自を最大限に生かした贈り物を、兵十に贈ったことになる。また加助がこれを「神様のしわざだ」と言うのは、出来事の不思議さのみならず、「栗や、木の子」の出所として五郷社をはじめとする寺社の境内林が第一の可能性として考えられるからであろう。

そして、ごん狐が棲んでいるのは「中山から少し離れた山の中」(「権狐」第一節)だと物語本編の冒頭で明記されている。つまり、ごん狐の贈り物の背後には、山林を管轄

する領主、「中山様」の影がある。だからごん狐の贈り物を兵十が話題にする場面で「中山様」が登場するのは、理に適っている。次の第四節で中山様が登場するゆえんである。

第四節には、「背戸」の語が見られないかわりに「中山様」が複数回登場するのだった。

月のいゝ夜に、権狐は、あそびに出ました。中山様のお城の下を通つてすこし行くと、細い往来の向ふから、誰か来る様でした。(中略)それは、兵十と、加助と云ふ百姓の二人でした。

この場面でごん狐は、兵十が加助に「おつ母が死んでから、誰だか知らんが、俺に栗や、木の子や、何かをくれる」者があると打ち明けるのを聞く。「中山様のお城の下を通つて」という記述は、単に出来事の舞台を描写するため偶然に現れたように見えるが、実は必然的な意味を担っているだろう。他の節で事件が動く際に必ず現れる「背戸」が、この節のみに一度も見られない。しかし「中山様」は二度、登場する。

「吉兵エと云ふ百姓の家」で行われた「お念佛」に参加した後に出てきた兵十と加助を、こっそり待ち受けていたごん狐は、二人の次のような会話を聞く。

中山様のお城の前まで来た時、加助がゆつくり云ひ

だしました。

「きつと、そりやあ、神様のしわざだ。」

ごん狐は「神様に毎日お礼云つたが好い。」という加助の言葉に、次のように反応する。

権狐は、つまらないなと思ひました。自分が、栗やき、こを持って行つてやるのに、自分にはお礼云はないで、神様にお礼を云ふなんて。いつそ神様がなけりやいゝのに。

権狐は、神様がうらめしくなりました。

この神様をうらめしく思う気持ちには、兵十に撃たれながらも自分の行為に気づいてもらえ、「権狐は、ぐつたりなつたまゝうれしくな」つた、というラストの記述に続くものなので、重要な布石となる。この気持ちを誘発する場面すなわち兵十が加助に「栗や、木の子や、何か」をくれるものがあると言ふ行為、および加助が兵十に「神様に毎日お礼」を言えと進言する行為をごん狐が傍聴する場面には、それぞれ「中山様のお城」が存在感を現すのである。前稿で述べた「中山様」の役割は三つあった。

(一) 害獣を駆除して農地を保全・拡大し年貢を納めさせるため、火縄銃所持を農民に許可した。

(二) 領主管轄の山林（御林）を守ることで、そこに棲みつく害獣（ごん狐）を間接的に保護した。

(三) 神明社を強引に八幡社に建て替えた（南吉の考えでは、これが村民の争いの元をつくつた）。

右を念頭に置けば、ごん狐の贈り物の背後に感じられる領主管轄山林の存在と中山様の存在感とが重ねあわせられることによって、中山様が担う他の要素、つまり火縄銃による害獣駆除と「神様」を仲立ちとする紛議紛争とが予感される。ごん狐の贈り物と中山様の登場は、害獣と農民との対立関係の中でごん狐が火縄銃で撃たれることの、布石となっているわけである。

これらの布石が導く流れにしたがつて結びの第五節では、栗をもってきたごん狐を見かけた兵十が火縄銃で撃つてしまふ悲劇が語られる。

その日も権狐は、栗の実を拾つて、兵十の家へ持つて行きました。兵十は、納屋で縄をなつてゐました。それで権狐は背戸へまわつて、背戸口から中へはいりました。

ふたたび「背戸」の語が現れ、事件は「背戸口」で起こる。この日もごん狐は「背戸口」から兵十の生活圏に侵入する。ラストの悲劇もまた、「背戸口」で起こる。

登音をしのばせて行つて、今背戸口から出て来ようとする権狐を

「ドン！」

とうつて了りました。

権狐は、ばったり倒れました。兵十はかけよつて来ました。所が兵十は、背戸口^⑧に、栗の実が、いつもの様に、かためて置いてあるのに眼をとめました。

「背戸口」から兵十に近づいたごん狐は「背戸口」でたおれる。兵十は自分の過ちの証拠を「背戸口」で見つける。そもそも、「背戸川」で鰻を獲る兵十にごん狐が近づいたところから物語が動き始めるのだから、物語の全体が背戸に始まり背戸に終わる形になっている。

水利・治水で対立関係にある阿久比との位置関係を連想させる「背戸」は、岩滑の民にとつて、紛議を想起させる記号である。だから背戸川で鰻を獲る兵十は、すでに紛議を予感させている。そこに背戸の側からごん狐がやってきて兵十の獲った鰻を盗るとき、南北の対立の火蓋が切られることになる。

ごん狐は五郷社の境内山林すなわち権現山に棲むところからこの呼び名があることにほぼ疑いの余地はないだろう。この五郷社付近に、「狐谷」「鰻谷」という地名がいくつもあり（「東狐谷」など）、ごん狐の出自を地元民に強く印象付けていることに前稿でも言及した。^⑧「狐」や「鰻」は、背戸川の北側、阿久比のものなのだ。

一方、兵十は中山様の居城であった岩滑城近辺、すなわ

ち常福院・岩滑八幡社のあたりか、またはそのやや南、中山城があったとされる中山の丘（現在、新美南吉記念館が北の一角にある）近辺に住んでいる。語り手も「権狐」の話を八幡社境内の若衆倉（宝蔵倉）で、幼い頃に茂助爺から聞いているから、岩滑の間人である。

これらを地元の人々はすぐに直観できたはずなので、物語冒頭を読むと、「南の兵十が勝手に北の鰻を獲りに来た。だから北のごん狐が南に降りて来てそれを取り返した」という読み方がなされ得る。このようなところにも、南北対立の暗喩が織り込まれていると見ることが出来る。

こうして、北のごん狐が南の兵十から北の鰻を取り返す物語、北のごん狐が北の森の栗や松茸を南の兵十に贈る物語、という構図が、物語に散在する暗示的な語や設定から現前してくる。川を挟む南北の確執とそこから生まれる悲劇を暗示する物語が、この物語を読む、この地域に長く続く確執を生きてきた読者の脳裏に形成されることになるだろう。

二 「権狐」前史に遡及する

——天保と安政に鍵がある

以下、阿久比と岩滑を中心とする地域に存在した水利・治水をめぐる紛議の実態を確認し、それらがいかに「権

狐」の物語世界にかかわるかを検討していく。

前稿で言及したように、南吉は岩滑村に「争いが絶えな」いことを憂えていたという。南吉と同郷で少年時代の南吉を知る大石源三が、次のようにそれを証言している（前稿でも引用した部分を再度掲げる）。

南吉は、中学生のころ、義烈組の宝蔵倉の前で、山城主の子孫である中山文夫氏に、

「この岩滑の村が二派に分かれて昔から争いが絶えないのは、お前の先祖の勝時が、氏神さんの神明社があるのに、八幡宮を勧請して八幡社として神明社をわきにまつり、氏神さんをないがしろにしたからだ」と、語っていたということです。^⑨

中山勝時が一五四三年、領主として岩滑にやってきたとき、伊勢神宮からこの地の神明社にとりにきた初穂料を断るため、神明社の境内に強引に八幡社を建立したことは前稿でも言及した。『半田町史』複数箇所にもその記述があった。南吉はこれが岩滑村に悪い影響を与えたと、中山勝時の子孫・文夫を責めたわけである。その場所が、語り手が茂助爺から「権狐」の話をきいた若衆倉の前、つまり宝蔵倉の前だった。

南吉が中山文夫の家に入りびたりのようにしばしば訪れ、文夫の母から昔ばなしや郷土の伝説を聞くのを日常として

いたことは、文夫の回想記（『私の南吉覚書』^⑩）に克明に記されている。大正七年生まれ、南吉より五歳年下の文夫と南吉は、ぶしつけな言葉も遠慮なく交わす近しい間柄だった（文夫はしばしば南吉から散々に言い負かされ、悔しい思いをしたと回想している）。

大石も右の、神明社と八幡社が併存する特殊な状況について、次のように言う。

祭礼も四月の本祭礼は八幡宮の祭り、九月の秋祭りは神明宮の祭りで、一年に二回の祭礼神事が行われ、年末に氏子に配られるお札も「八幡宮大麻」と「天照大神宮」の二枚が配られています。こうしたことから、岩滑の村では、江戸時代の末ごろから対立や紛争が多くなっていました。^⑪

大石の言う「江戸時代の末ごろ」とは具体的にいつ頃のことだろうか。そして岩滑村の「対立や紛争」のそもその直接原因は何だったのだろうか。

大石が言及する八幡社（通称・岩滑八幡社）の特殊な事情や岩滑の紛議について、どちらも『半田町史』に同様の記述がある。そして大石が言う「江戸時代の末ごろ」を起点とする岩滑村の紛議について、管見では『半田町史』以外に記載している出版物が見当たらない。また『半田町史』が根拠としている近世の古文書・古記録の類を一般生

活人である大石が探索し読みこなしたとも思えない。「江戸時代の末ごろ」を自身は知らない大石が依拠した情報源は、おそらくこの『半田町史』である。

大石が読んだと思われる『半田町史』中の岩滑村八幡社にかかわる紛議記事は次の部分である。

岩滑村は、天保以来兎角紛擾多くして村治の圓滿を歎きしと云ふ、安政三年神社の祭文殿を建築したる時、其の経費処弁に關して訴訟を起し、同六年中埜半左衛門小栗三郎左衛門兼帶庄屋となるに及んで漸く解決を告げたるが如きは其の著しき例なり。¹²

右は、「第一編 地理及沿革／第四章 半田町の沿革／第七節 土地の境界其他紛議」の「四、岩滑村八幡社」の項にあたる。この第四項の記述は他の項に比べてごく短く、右で全文である。しかし「第七節 土地の境界其他紛議」は全体で十三頁、六つの項からなっており、その中に独立の一項としてこの項が含まれているので、短くとも存在感は小さくない。

このような章立てと記述内容により、「岩滑村八幡社」が「土地の境界其他紛議」を代表的に想起させる場所であることがまずわかる。「権狐」がこここの境内で語られたという設定は一見、物語内容に不要な情報のようにだが、岩滑の歴史を知る読者にとっては物語世界の成立背景として村

の紛議があることを感じさせる強い暗示を伴っている。

記述内容を見ると、挙げられている事例は「神社の祭文殿を建築」するための「経費処弁」にかかわる紛議なので、「天保以来兎角」続いているという「紛擾」はもっぱら村内での出来事を指すようである。大石が証言する南吉の言葉（中山文夫から伝え聞いたものだろう）も、岩滑村内（正確には、当時の半田町岩滑地区内）が二つの派に分かれて争っているように読める。

しかし『半田町史』の構成と記述内容を見ると、この地区の争いごとの背景として、この地域が共通してかかえる対立構造があることに気づかされる。

それが、この地域の治水問題である。岩滑のみならず、知多半島のこの周辺地域全体が、江戸末期より紛議の絶えない状態を続けてきた。その原因が、きわめて被害を受けやすい海辺の低地域に農地が広げられ、そこから収穫を得るために互いに水利権を主張し合い、治水の便を主張し合うよりなかったことにある。

岩滑村八幡社の記事のある第七節を見渡せば、ここに含まれる残り五つの項はそれぞれ、以下のような趣旨である。「一、藻採場の境界論争」は、江戸時代初期から明治初期にかけて、「往時地方農家の肥料は海藻を以て唯一とし」ていたため、海藻採取のための海面境界線をめぐる紛議が、

「半田村」(岩滑村のすぐ南に位置する)と「成岩村」(半田村のすぐ南に位置する)との間、および「半田村」と「乙川村」(ほぼ北から南に流れる阿久比川を挟んで半田村の東に位置する)との間にあったことを述べる。

「二、英比川の流作」は、「権狐」の重要な舞台となった矢勝川を含むこの地域の、主要な川(英比川は阿久比川に同じ)の治水をめぐる、主に阿久比村と半田村(岩滑も関係する内容だと思われる)との、天保年間の頃の紛議について、足掛け三頁、実質二頁半を割いて記述している。

「三、桶戸池井領米」は、文政十年(一八二七年)に起こった、払い下げ地である「桶戸池」にかかわる岩滑村庄屋の不正(事実上の払い下げ料着服)事件を記述する。

「五、字荒古の土地及戸口編入」は、「商業及航海業の発展」のため、半田村住民の一部が、南に接する成岩村の一部(海岸地域)に居住地を置き町をなすようになっていたことが原因で、明治八年〜二六年にかけて起こった紛議を記述する。明治二十二年の地租改正後、最終的に半田町(旧岩滑村・半田村)が同地を「半田荒古」(現・半田市荒古町)として吸収編入するまで、成岩村と激しい綱引きがあった。

「六、阿久比村との水利関係」は、矢勝川を挟んで北側の阿久比村と南側の半田町(ここでは旧・岩滑村を中心と

する地区)との間に、主に明治三二年以降に存続した、矢勝川治水をめぐる紛議を記述する。この節で最も詳細な記事のある項であり、足掛け七頁、実質五頁半を費やしている。(第六項は後節で改めて詳しく見る)

こうして第七節全体を見渡してみると、第四項「岩滑村八幡社」以外の項目がほぼすべて水利・治水にかかわる記事となっている。その中に神社祭文殿の建築費問題があるのは、いかにも不自然である。前後の文脈を考慮すれば、これは水利・治水関係記事の一貫として配置されているのではないかと考えられる。

ひとつの根拠として、第四項記事に天保と安政という二つの年号への言及がある。この二つの年号は、第七節中の他記事でも繰り返言及される重要な年号である。これらはこの地域にとつて、ターニングポイントとなった時期だからである。その二つの年号を備えた第四項は、同じ年号に言及する他の項、つまり水利・治水記事と連動した内容になっていると考えるのが合理的である。

例えば第四項記事の二つの年号と連動しているのが第二項である。ここですでにそれらの年号の意味が説明がされていることに気づかされる。なぜ「天保以来」なのか、なぜ「安政三年」に事件が起こったのか、前もって歴史的な原因が説明される構成になっているようである。その原因

が、水利・治水問題である。

その第二項「英比川の流作」を詳しく見てみる。まず川の名称について確認する。以下に言及する「英比川」は矢勝川（背戸川）を支流とする、半田町を北から南の海岸地区に向かつて縦断する河川であり、現「阿久比川」の旧称である。

現在の地勢では「英比川」と呼ばれる小運河が「阿久比川」とは別であり、これは初め阿久比川の東岸に沿って北から南に流れ、矢勝川と阿久比川の合流点よりやや南で東から西に伏せ越し（河床の下にトンネルを掘って縦断）し、阿久比川の西岸に沿って流れる小運河「十ヶ川」に合流する。しかし左記引用文中の「英比川」は、位置的に岩滑村や半田村と接している川であり（岩滑・半田は、北は矢勝川、東は阿久比川の西岸に接して広がる村である）、しかも砂州ができるほどの規模の川でないと不合理なので、同じ「英比川」の表記であっても「えびがわ」（小運河）ではなく「あぐいがわ」（二級河川）を指している。

また「流作」（りゅうさく）または「ながれさく」とは「河川や湖沼池の堤外の新田」をつくることをいう。「堤外」は川の堤防の内側を指す。砂州や河川敷のような場所に新田（田圃とは限らず畑も含む）つまり「流作場」を作るので、水害には遭いやすい。

この流作について、第二項記事は「英比川に寄洲多く附着せしより、半田村、乙川村の人民之を開拓して米麦蔬菜を作付たり」（一〇六頁）と解説する（蔬菜は草本作物の総称）。「寄洲」とは河口や海岸などに土砂が風波で吹き寄せられてできた州のことで、この場合は阿久比川の砂州や流れ沿いにできた平地をいう。

然るに英比谷諸村より、水行の妨碍となるが故に取拂方屢々請求あり、遂に鳴海陣屋よりは検地として代官出張せしも、英比村の苦情容易ならざるより、代官も頗る惶惑し即時に決定すること能はず、長尾村三井傳右衛門を招き、之に耳囑して半田村を去るに及び之を諭して曰く、右切開の儀川上村々を呼出し相糺候事無之段陣屋の無念に候故長尾村傳右衛門へ取扱方申付候に付傳右衛門ら相談可致云々と述べて代官出發せり、是れ時に天保四年四月なり。（一〇七頁）

英比谷諸村は東西に流れる矢勝川の北側に広がる地域、半田村は矢勝川の南側、そして乙川村は矢勝川と南北に流れる英比川との合流点より南方、英比川の西側にある半田村に対して、川の東側にある村である。つまり矢勝川・英比川の合流点より南方の英比川砂州などに、半田村・乙川村が大規模な作付をしていた。しかし海岸に近いこの地域は、水害に遭いやすい。大雨が降った時に英比川の流れを

妨げる作物があると、上流に位置する英比谷諸村で堤防の決壊が起きやすいので、苦情を申し立ててきたというのである。しかもかなり強硬な申し立てである。

尾張藩の地方役所である鳴海陣屋（名古屋市内に現在もそのあとが保存されている）から代官が来たが、「英比村の苦情容易ならざる」もののため解決し得ないほどであったのは、それだけこの地域が度々水害に悩まされてきたためである。そこで半田村の南方にある村、長尾村の三井傳右衛門（酒造業をいとなむ豪商）に調停を委嘱したのが、天保四年（一八三三年）四月だったという。

「その後数回」の交渉で十一月に相談がまとまり、十二月には「竿入」（検地）のための「境杭打立」てをしようとするが、「又々英比輪中より多人数罷出甚だ乱暴」があったが制止して予定通り検地を行ったというから、検地の現場に英比側と半田側の農民が詰めかけ、双方がにらみあった状況が想像される。こうして、それまでの流作場を大幅に縮減させることで協議が成り、「翌年申正月十七日」には調印となった。（二〇七頁）

縮減の規模について『半田町史』は、次のように数字をあげている。

文化五年御竿入分 八反四畝十八歩 貳反五畝三歩
全 十二月全断 二反二畝八歩 壹反五畝十五歩

（二〇七頁）

英比川に相当の面積の流作場をもっていた半田村、乙川村は、それらを半減から四分の一程度に縮減ということになり、作物の収穫減も大きかっただろう。

天保四年といえば、近世三大飢饉の最後にあたる天保の飢饉が始まった年である。この年はまだしも東北および北関東地方を中心とする大凶作だったが、天保七年（一八三六年）には全国規模のものとなっているので、右の減反は村民にとって大きな痛手だったに違いない。

また、この縮減策で流作にかかわる紛議はようやく収まるかにみえたが、二十余年後の安政二年（一八五五年）には、結局流作場は全廃となる。

然るに安政二年卯年大洪水あり、英比川堤防大破損半田入水等の事ありしより、水行の支障となるに付凡て廃拂被仰付云々とあり。（二〇七頁）

この一連の事件を『半田町史』は次のように要約している。

当時の事情を熟々案ずるに、天明の飢饉以来藩主に於ては大に開墾を奨励し苟も米穀の登熟する見込あるの地は努めて之を開拓せしめ、英比川の如き小川に至る迄流作を許可したるが故に、当初は一町有余にも達せしが、天保年代に至り上流諸村の苦情となり大に之れ

が反別を減少したるも、安政の大洪水あるや止を得ず之を禁止したるものゝ如きなり。(二〇七頁)

近世三大飢饉の最初にあたる天明の飢饉のあと、統治者は積極的に開墾を奨励したので、大河というほどではない英比川における流作も大いに拡大したが、天保の大飢饉の頃より治水悪化のため上流の英比谷諸村から厳しく苦情が出るようになり、安政二年(一八五五年)の大洪水が起るに至り、水流の妨げとなる流作場は全廃となった。

洪水の被害を受け、しかも流作場も失った矢勝川以南の地区の農民は経済的困窮を深めたことだろう。ここに、岩滑村八幡社祭文殿の建立経費問題が起るゆえんがあったと思われる。

これらの記事により明らかになるのは以下のような、この地域の水利・治水紛議史のターニングポイントとなった出来事である。

天保四年に流作場の扱いをめぐって、矢勝川の北側(英比谷諸村)と南側(半田村・乙川村)の決定的な対立が始まった。水害を防ぐために流作場の廃止を要請するも耳を貸そうとしなかった南側に対して北側の遺恨が残った。天保四年～五年の流作場縮小、安政二年大洪水後の全廃で、南側の北側に対する遺恨も残った。

第七節は水利・治水関係の紛議記事を年代順に列挙して

おり、これを見れば、矢勝川南北の因縁の確執が、天保四年を起点とするものであること、安政二年の大洪水に伴う水害で(流作場のために北側の被害が大きくなったと見られる)その確執がさらに決定的なものになったことが了解できる。

ここでの当事者に岩滑村の名前はないが、矢勝川のすぐ南に位置するのは岩滑村であり、その南に半田村が接している。矢勝川と阿久比川との合流点以南の、流作場があったと思われる地域には、岩滑村も含まれているので、岩滑が無関係だったとは考えにくい。『半田町史』には岩滑と半田をセットで扱っているらしい記述が見られるから(本稿第四節参照)、『半田村』に「岩滑村」を含めて記述した可能性が高い。

そうでなかったとしても、天保と安政に言及する点で第四項記事は第二項記事との連関を見せており、天保より紛議が始まり、安政三年に事件が起こったとするその記述は、この地域の水利・治水争いの歴史と軌を一にしている。この天保・安政のつばぜり合いが、第六項に記された近代の紛議史としての半田町と「阿久比村との水利関係」に連なっていくことになるので、すべては一連の連関する出来事として記述されているといつてよいだろう。

また『半田町史』の水利・治水関係記事は、以下にその

例を見るように、相互に補い合い説明しあう相互参照関係にあるという特徴がある。第四項「岩滑村八幡社」もその中に位置づけられていると見るのが、文脈上合理的である。さらに、治水史を記した第五節も第七節と相互参照関係をもっている、次の節ではこれを検討したい。

岩滑関係村名、町名の時代による変遷を略述しておく。

町史が編纂された時点で半田村と岩滑村は合併して「半田町」となっていた。この合併は明治二二年で、それ以前は「半田村」であり、この村内に近世の旧・岩滑村と旧・半田村が含まれていた。旧両村が合併して「半田村」となったのは明治九年のことである。（乙川村は明治二二年、「亀崎町」に吸収合併された）。

三 矢勝川をめぐる攻防

——治水問題と岩滑・阿久比の歴史的確執

第七節第六項に列挙される紛議について、その二節前の第五節が、あらかじめその前提となった状況を説明している、さらに遡って紛議前史をたどる（因みに第五節と七節との間に挟まれた第六節には、地域の「道路」について足掛け四頁、実質三頁弱の記述がある）。「第一編 地理及沿革／第四章 半田町の沿革／第五節 河川の改修及変遷」の第一項「英比川の旧形」に次のようにある。

慶長検地以来英比谷及岩滑半田等、諸村の悪水排除の河川に幾多の変遷あり、即ち慶長以前に於ける半田付近の地勢は、英比川の末流は現今矢勝川の合流点たる三股の上流にして、其余の下流々域は凡て海面の干潟なりしこと明かなり（九一頁）

矢勝川以南、岩滑・半田村以南は古くは干潟であつたので、どうしてもこの地域に水害はつきものだということがある。そこで第五節では、川の水害状況と対策、運河開削の歴史等を十項・十三頁にわたって記述している。例えば第三項「十ヶ川の開通」には、次のような説明がある。

英比川及其支流に属する流域田圃の悪水は、当初皆其河川に奔注し居りしも、河床の漸く高まると共に排水不良となるは自然の数なり、是に於て支流の堤下に樋管を通じて之を下流に送り、下流より之を本川に排したること論なし、三十三間枋、十九間枋、岩滑枋（文久の頃十九間に合す）及四十二間枋の類是なり、然るに本川の流も漸く長く、河床益々高くして排水の道立たざるが故に、茲に十ヶ川を開鑿し本川に依らず直に海中に奔注せしむるの止むべからざるに至り、之を起工せしものなるが如し（九二頁）

「十ヶ川」は、「延宝天和の頃」（一六七三年～一六八四年頃）、阿久比川の西岸にそって開削された小運河である。

「十ヶ村より井領米を出して開鑿」（九三頁）したためにこの名称となった。「杵^⑮」（いり）はため池や川などから田畑に水を引くための取水口で、土手や川の堤防に穴をあけて樋管を通したものである。なお、「三十三間杵、十九間杵、岩滑杵」はすべて矢勝川に設置されている。

阿久比川の河床が時代とともに堆積物で高くなり天井川となるにしたがって樋管を用いるなどの対策をとらざるを得なくなった。支流から取水した水はまた下流で本川に戻していたが、阿久比川天井川化がすすむにつれてそれも困難になり、排水を直接海に流すための運河が必要となって十ヶ川開削に至った。

第四項「英比川及十ヶ川の東流」を見ると、半田村が文政二年（一八一九年）頃、田地を拡大し、英比川および十ヶ川を東に屈曲させたため、上流の水行がやや悪くなり、英比各村が「屢々苦情を唱」（九四頁）えるようになったという。さらに、元に戻すよう陣屋に依頼したが、陣屋から諮問された田地の持ち主がそれは迷惑だと抗弁書を出したという。ここですでに矢勝川北の英比谷と矢勝川南の半田村との対立が見られるが、まだ決定的な対立関係にまでは至っていない。このときの阿久比側のわだかまりが、天保年間の衝突につながったものと見られる。

第五項「五番川の開通」は第三項に続く記事であり、享

保十四年（一七二九年）から寛保元年（一七四一年）頃にかけて、今度は「十ヶ川」の河床が高くなり「排水不良とな」つてきたため岩滑村から半田村にかけて流れる「五番川」運河を新たに作ったことを記述する。

このように、排水不良対策のために新たな運河を作るなどをしたとしても、年月とともにさらに対策が必要になる。すると、それに伴い各村の利害が対立し問題が起こる場合も多々ある。沿岸部の農地であるこの地域の宿命と言つてよいだろう。以下、この第五節には同様の運河や杵の開通や改修記事がしばらく続く。

そしてこの節最後に位置するのが、第九項「矢勝川伏越樋門の改築」と第十項「矢勝川伏越諸樋管」であり、両項とも矢勝川関連の記事である。

まず第九項「矢勝川伏越樋門の改築」を見る。これは第三項「十ヶ川の開通」に言及があった「三十三間杵」および「十九間杵」の二つの「杵」が、その後明治期に紛議の種となった経緯である。「伏越」（ふせこし）とは「水路が河などの下をくぐる所に設けた暗渠^⑯」のことで、阿久比側が排水のために、矢勝川の川底にトンネルを掘って南の半田町側に通したものと考えられる。例えば「十ヶ川」運河は同様に、現在も矢勝川を北側から南側に伏越しにより横断している。

三十三間枋、十九間枋の二個は、(中略) 水行甚だ悪し、之を以て西英比各村の低地及半田町字欠下、後田等の低地が、水害を被むること屢々なりしを以て、時の町長中塾半左衛門町会に諮問して之を承諾し連署出願したりしが、県庁に於て人造石に改築の事勧告あるや、阿久比村は単独変更して許可を得たれば、半田町に於ては其水量の多きに異議を唱へ、遂に明治三十三年三月三十一日を以て、左の契約をなし以て解決するを得たり。(九八〜九九頁)

(中略)

是に於て前記の両樋管を廃し、人造石を以て巾着間高四尺五寸の樋門二個を併置し、明治三十四年三月竣工したり。(二〇〇頁)

「西英比各村」は矢勝川の北側、「半田町」は南側である。明治に入つて岩滑村・半田村は一つの町となり、矢勝川沿い西方にあつたとみられる「字欠下^{かけした}」や「後田^{うしろだ}」も半田町に組み込まれた。

右引用文の趣旨を確認する。矢勝川に設けた二つの枋の水行が悪いため、阿久比村側も半田町側もたびたび水害を受けた。そこで二地域が連署して改修を出願したら県庁は人造石で改築するよう勧めた。阿久比村は自分たちだけでそれを受け入れ改修の許可をとった。しかし石の樋門では

水量が多く半田町には不利なので異議を唱えた結果、明治三三年に協約が成り、双方合意の上で「人造石」を用いた「樋門二個」を明治三四年に完成した。

さて右引用文中に「左の契約をなし」とあつたその契約がまた、のちの紛議の種となる。内容は、半田町側が石の樋門を承諾する代わりに、阿久比側は欠下と後田にある樋管(矢勝川に設けたもの)を広げることを了承する、というものである。この取引の前史および後日談が、次の第十項「矢勝川伏越諸樋管」で説明される。

この第十項は、矢勝川に設置された三つの「伏越諸樋管」について、個々にその設置時期と経緯を列挙する形になっている。

まず「内濱枋」は後田・欠下、および排水用の運河(丁田川)堤防内の水をヶ川に流すためにあつたが(経路等の詳細は不明)、平常時はこの水量が豊富なので「植村大古根の者之を用水に引かんとして中間の堤防を破壊すること甚し」(二〇〇頁) かつたので、協議の上、「十九間枋」と合併させることにしたという。植村、大古根村は、矢勝川北辺の阿久比地区のうち矢勝川沿いに位置する当時の村である。つまり水利をよくするために、岩滑所有になる運河の堤防をこの二村の農民が勝手に壊して水を引く例が絶えなかつたので、「安政二年迄」(一八五五年まで)は確か

に存在したが、「古老の実話に依れば文久以后」（一八六一年以後）には（右記合併のため）なくなったという話である。

次に「後田樋管」は、「植村、大古根村」側が「下流」となる伏越樋管で、右記「内濱杵」合併後、この二村による水害の訴えのため、「壹尺五寸四方」だったものを「壹尺一寸四方」に縮小させられたものらしい、という。これが「内濱杵」問題への処分に対する「植村、大古根村」側による意趣返しかどうかは明記されていない。

最後に「欠下樋管」もまた、右の「後田樋管」が縮小になった際、同様に「壹尺二寸四方」だったものを「九寸四方」に縮小させられたという。記事には続けて「爾来、欠下は後田と共に被害多く、即ち三十三年の協約に欠下、後田の樋管を応分に広め云々ある所以なり」とあるように、このときの縮小が、前述した人造石樋門築造の際の、両樋管拡張工事を阿久比側が了承する、という契約につながっていく。

ここまでが、第九項「矢勝川伏越樋門の改築」の前史となるので、いったん要約する。

幕末の頃、阿久比側からの苦情により縮小させられた二つの樋管が半田町側（就中岩滑）の治水を悪化させていた。そこで明治三三年の契約において、阿久比に有利な人造石

樋門築造（半田側を下流とする伏越樋門を大きくする工事）に同意する代わり、半田町側はこの二樋管（阿久比を下流とする伏越樋門）の改修の了承を得る、という約束を取りつけるに至ったということらしい。

ところが協約から十年後、明治四三年に半田町が欠下の木製樋管を径の広い土管に改造しようとする、阿久比町は承諾をしなかった、ので、元の径と同じ木製樋管で改修するよりなかった。次のごとく。

半田町は四十三年一月欠下の木樋を土管に改造せんとし、其出願に際し対岸の承諾を求めたるに阿久比村は之を承諾せず、半田町は止を得ず原形の木樋を以て改修したり、為めに四十四年の如き半作にも及ばざる状況なりき。（二〇二頁）

右「四十四年の如き」の部分について、『半田町史』「天災事変」の章には「四十四年大雨あり、僅々数時間にして忽ち諸川増水し英比川の堤防東西所々決潰」（三七六頁）とある。この大雨で、阿久比側は「河水の流出容易に、僅々三日間にして退水するを得た」が、半田側の後田は五日間退水せず「稲田の腐敗するもの貳町余歩」だったとの記述がある。阿久比側と半田町側の排水の差が鮮明に出たわけで、収穫が例年の「半作にも及ば」なかった半田町側の恨みは深かったことだろう。これが第九項記事の後日談

となる。

以上第五節記事に、第七節紛議記事の前提となる治水状況の経緯説明を見た。水害を受けやすい地勢を背景とする地域間の対立の歴史がこの地域のとりわけ阿久比と岩滑・半田地区にあった。そうした経緯を背景に、第一編の最後となる第四章第七節の、さらに最後を占める第六項が詳細に記述するような、両地区の間の泥仕合の連続ともいえるべき確執がもたらされることになったわけである。

四 明治期の大騒動

—— 決定的衝突とその後の泥仕合

再度、第七節第六項「阿久比村との水利関係」を確認する。この項は「英比諸村就中植、大古根と半田、岩滑とは、其悪水に將た用水に其紛議あること、古今を通じて殆んど恒例の如くなり居れり」の一文から始まる。英比つまり阿久比の「植、大古根」は矢勝川のすぐ北にある。岩滑（旧・岩滑村）は半田町の北の端、矢勝川のすぐ南にある。そのすぐ南が半田（旧・半田村）だった。

右記述のように『半田町史』は「植、大古根」と「半田、岩滑」を、それぞれひと組のセットとして考えていたようである。川を挟んでこの二つの地区が、幕末より激しい対立を続けてきたからだ。この地域の水利・治水紛議を代表

するのが、この「二派」の争いである。他に多数の水利・治水紛議はあったが、この二つの地区の場合ほどに恒常的・持続的ではない。

対立は明治期に至り、ついに次のような事件となる。

明治三十二年の洪水あるや、阿久比村大字棕岡地内に英比川決壊し、植大田圃に溢漲し来るを以て、植大人民は英比川、矢勝川の合流点に乙澤を開きて之を放流せんとす、然るに半田、乙川等下流の人民はこれを聴さず、双方川を挟んで相争ひ將に一大騒動を惹起せんとす、是に於て郡吏、警官等出張して漸く之を鎮撫したり（一一一頁）

矢勝川の北で阿久比川が決壊したため、矢勝川と阿久比川の合流点すぐ北（現・植大駅のあるあたり）の「植大」（明治に入って旧・植村と旧・大古根村が合併して植大村となり、明治二年阿久比村となった）人民たちは、この合流点に「乙澤」（放水口）を開けて矢勝川の南側に排水しようとした。しかしその南側の半田や乙川の人民たちは、自分たちの田畑が水につかつては困るので阻止しようとした。その結果、大騒動となり郡吏、警官の出動するまでになったのである。これは天保の、流作場をめぐる英比谷農民と半田村・乙川村農民とのにらみ合いを想起させる、その再来ともいえる事件状況だった。

同じ事件を記した記事が、「第五編第二章 天災事変」にもある。

三十二年十月七日大雨あり、英比川堤防及支流多く決潰して遂に大古根田圃に充溢するに至りしかば、西英比の諸村民乙澤（放水口）を開かんとせしが半田乙川の両町民之を許さざるより、双方の消防組等数百人川を挟みて争ひ一大騒動を惹き起し、郡長警官等の仲裁に由り漸く決着するを得たり。（三七六頁）

数百人が大雨の中、川を挟んでにらみ合う騒動は、この地区の人民の記憶に強く残るインパクトをもつただろう（右記事の「半田」に含まれる第一の地区は、矢勝川直下の岩滑である）。

記事は「此の騒動や即ち動機と為り矢勝川伏越樋門改修の議起り、遂に翌三十三年之が改修を決行したり」と続き、さらに「尚其後の事件を序列すれば即ち左の如し」（一一二頁）として、その後の経緯を八つの小項目にわけて逐一列挙している。

第一小項目「○矢勝川伏越人造石樋門」は、右にいう「三十三年」の「改修」についての記事で、これが先の第五節記事にすでに説明のあった「三十三年秋、十九間杓」の「改築」にあたる。その経緯は上に見たとおりであり、阿久比・半田の連署で改修を出願したものの、阿久比は勝

手に人造石樋門に改築しようとして紛議になり、各種協約（前述の、欠下・後田両樋管拡張工事を阿久比側が了承する、および後述の、樋門に「制水石」を設置する、など）を交わした上で予定通り竣工した。

第二小項目「○前段の余波」は、右にいう阿久比の専断を不快とした「岩滑部人民」が工事の負担金を拒み、ひと悶着の末、負担金を減額して解決した内容。

第三小項目「○矢勝川堤防の腹附工事」は、半田町が矢勝川の堤防の補修（ふくつけ腹附）をするために「明治三十八年三月対岸の承諾を阿久比に求」めると「阿久比村は之に對して故障を申立て、人造石樋門柱の障害物即ち制水石」の除去、すなわち阿久比から半田町側に流れる水を制限・制御するための石を撤去せよという条件を出してきたという記事。半田町は拒否したが、制水石はいつの間にか除去されていたという。

第四小項目「○制水石の撤去」は、「明治三十三年人造石樋門改修の際紛議」があったため、「同樋管口に制水石を設置し、（半田町側が）十ヶ川の堤防を改修する迄水量を制限することゝな（カッコ内論者）」だったが、いつの間にか「撤去せられ」、「四十四年十ヶ川の堤防決潰」があったとき半田町が探したが所在が分からなかったという。

第五小項目「○欠下樋管の改修」は、これも第五節記事

に既出の内容で、明治四三年に半田町が欠下にある樋管について、阿久比側と明治三三年にかわした協約に基づき土管への改築了承を求めたが、阿久比は許可せず、やむなく元の通り径の小さい木製樋管で改修したとの記事。

第六小項目「○明治四十四年被害後の交渉」は、明治三年の阿久比と半田町の協約を、双方が確執して実行しないまま「四十四年に至り洪雨あり、阿久比村田圃並に半田町欠下、後田共皆潮水の如き状態をな」したが、阿久比村は人造石樋門や上流の樋管を改修していたので「二日乃至三日にて退水」したのに対し後田、欠下は「五日乃至七日を要し、後田は全く腐敗し欠下は半作以下の被害を被」ることになった。そこで「互に確執実施せざる協約を改訂して互に公益を図らんと議起」こり、大正三年三月に協議がいったんまとまったが、阿久比は、「東阿久比の悪水即ち四十二間杓改修」についても半田町が了承するという条項を盛り込むよう主張し、結局否決したとの記事。

第七小項目「○後田樋管の改造」は、阿久比から協約や制水石の再設置について回答がないままなので、半田町は欠下か後田のどちらかだけでも人造石樋門への改築了承を得られるよう交渉した。大正三年十月にいったんは後田の樋管改修が認められたが、十二月に工事に着手すると阿久比村長より工事中止の請求があった。石樋入口に制水弁を

つけることで一時解決したが阿久比村民は納得せず裁判となった。『半田町史』脱稿時（大正十五年）にはまだ解決を見ていない。

第八小項目「○落の杓の改修」は、「元禄八年半田池を築造するに当」たり、「植、大古根、岩滑の三村に分水する」協約があった。植（植大）および大古根は阿久比側の村である。「植大田圃に灌漑用として分水するもの」を「落の杓」といった。植大人民はこの杓の木樋を土管に改築する出願を勝手に出し、協約を知らない「郡長」は許可した。池主が知り異議を唱えたが植大人民は工事を続行しようとして紛議となった。郡長は工事の一時中止を命じ、池主との交渉の結果、給水口を池主が人造石で改築して管理し、その先を植大が土管に伏せ替えることで解決した。以上、「岩滑村八幡社」にかかわる第一篇第四章第七節の紛議記事を起点に、この記事のこの地域における歴史的な意味を明らかにするであろう文脈を、『半田町史』記事の中にたどってきた。そこにはこの地域の水利・治水にかかわる、延々たる泥仕合の観を呈する対立・紛議の歴史を読み取ることができた。

ここで改めて、南吉が「岩滑の村が二派に分かれて昔から争いが絶えない」ことへの憂慮を口にしていたという、大石源三による証言を再考する。大石が参照したと思われる

る『半田町史』の「岩滑村八幡社」祭文殿建築費にかかわる紛議記事（第七節第四項）は、そのみ読めば岩滑村内の紛議を指しているに見える。

しかし第一に、これは水利・治水にかかわる紛議が列挙される中に置かれた記事であり、同じ節の最終項には岩滑を中心とする半田町と阿久比村の治水紛議の詳細記述がある。少なくとも第七節中、第四項以外の各項は、水利・治水紛議の文脈の中で書かれている。第二に、岩滑は右に見てきたように、水利・治水紛議の中心にある。阿久比村と岩滑を含む半田町との関係が、最終的にこの地域の紛議の集大成の観を呈している。第三に、「二派に分かれて」の争いは、阿久比と岩滑（半田町）の関係がその最たるものである。他に多数の紛議が記述されているが、どれもこの二つの地区の関係ほどに恒常的で執念深いものではない。第四に、岩滑村「村内」の対立については、第七節の項目をたてて記述しておきながら、他の箇所には詳述がない。他の重要事件は複数の項や節にまたがって、別の角度から何度も記述されているのも、右に見てきたとおりである。

以上より考えれば、『半田町史』に基づく限り、南吉が口にしたという「二派」は阿久比と岩滑を指しているだろう。大石は、南吉の言葉を正確に伝えたわけではなく、南吉による発言を中山文夫から聞き、町史を読み、「岩滑村

八幡社」の記事を発見し、それで裏付けが取れたと思い、岩滑村内の紛議のことだと想定して書いたのだろう。しかし南吉の意図は、そうではなかったと思われる。

ただし南吉の発言は、大石の回想記が伝えるのみで、中山文夫の回想記には記述がない（あるいは、書き残すのを自家の恥と思ったのかもしれない）。この発言の信憑性に問題は残る。しかし本稿が主題とするのは、この発言の真偽や「二派」が何を指すか自体ではなく、この地域の水利・治水問題がどれだけ「権狐」成立に関係しているかという点である。南吉の発言は出発点に過ぎない。

大正二年生まれの南吉が育った環境の中に、いまだ阿久比との紛議は存続していた。例えば大正十五年時点で後田樋管改修の裁判は解決していない。もちろん欠下樋管改修問題も残ったままである（岩滑地区の農民にとっては死活問題である）。水害という宿命を負ったこの地域の住民として、この水利・治水問題を意識しないわけにはいかないはずである。

これだけの、泥仕合といつてよい紛議の連続があった。その連続の中に南吉も生きていた。この岩滑に生活をしてきた者が、『半田町史』に記述されたような紛議の歴史を意識せずに、紛議の主要な舞台となった矢勝川を舞台にし、それかなりの降雨量で増水している日を物語の起点とし

て選ぶことは、不可能だったのではないだろうか。

結

「権狐」には、それを知ってこそ悲劇の結末が、いかに舞台となった土地に根付いている歴史記憶を呼び起こし、それらを暗に引用しつつ、ある方向に向かわせようとしているかがわかるであろうような、物語成立までの前史がある。

その前史が、矢勝川をめぐる治水紛議の歴史である。

『半田町史』記事により、この地域で水利・治水関係の紛議がいかに大きな問題であったかがわかる。それは水害を受けやすい沿岸部で農業を行うこの地域全域の問題であり宿命でもあった。中でも阿久比と岩滑（または岩滑を含む半田町）の対立がもつとも先鋭であり、その水利争いの主要な舞台となった矢勝川は、そうした紛議を想起させるための最も有効な舞台である。

この、幕末から延々と続いてきた紛議の記憶が伴う矢勝川で、ただ生まれ育った土地にあるからというだけの理由で南吉は兵十に鰻を獲らせるものだろうか。南吉の時代にも紛議は続いており、しかも物語の始まりは大雨の後である。大雨の降った後は水がわき、必ずと言ってよいほどの地域の紛議の種が残されるのは、右に見てきたとおりで

ある。

そのような場所で生まれ育った作家がこの土地に根差した物語を発想するとき、無意識にであったとしても、郷里に根付く歴史を踏まえたものになるのは自然なことだろう。兵十の行ったはりきり漁は、網を川の端から端まで渡して行うので、阿久比村と半田町（岩滑）の境界線を越える川が町や村の管轄だとしたら、しかも川の両側が激しく確執している地域どうしだとしたら、さらにその川が確執の主要な要因だとしたら、こうした漁が気軽に出来るものだろうか。そのような疑念を起こさせるのが、冒頭の鰻獲りの場面である。しかもかなりの降雨があった後、南北の確執が再燃する予感を読者にもたせつつ、兵十は南北の境界線上で鰻を獲る。実に挑戦的な行為である。また何か紛議が起ころのではないか、そうしたはらはらを読者に感じさせる、物語の冒頭なのだ。

そして案の定、事件は背戸（背戸川）で起る。過去の怨恨にとらわれた者の悲しい結末は、作品発表当時のこの地域の住民にとっては強いメッセージ性があった。すなわち水利をめぐる確執への諷刺を、この物語から読み取らざるを得ない設定となっている。これは二つの地域の紛争を背景とする物語であり、物語前史としての紛議の歴史から連続する世界観を持っているのである。その連続のもとに

この作品を読む読者にとって結末の悲劇は、対立によっていつか引き起こされてしまうであろう悲劇を二重写しにしたものとなるだろう。

中山勝時による八幡社建立をその紛議の原因として想定するのだとしたら、「いつそ神様がなけりやいゝのに」というごん狐の独白は、南吉の独白でもあったのかもしれない。

注

引用に於いて、適宜旧字を新字に改めた（異体字は極力原文を生かした）。

(1) 拙稿「ごん狐はなぜ撃たれたか——「権狐」・火縄銃・中山様を繋ぐ必然の糸」（『京都語文』第二二号、佛教大学国語国文学会、二〇一四年十一月）

(2) 新美南吉「権狐」（『新美南吉全集』第十巻、一九八一年二月）、以下「権狐」よりの引用は全集による。

(3) 「背戸川」（『新美南吉全集』第十巻、一九八一年二月、「権狐」語注六七頁、および「背戸川」（『新美南吉全集』第二巻、一九八〇年六月、「耳」語注三五八頁）

(4) 武井弘一『鉄砲を手放さなかつた百姓たち 刀狩りから幕末まで』朝日新聞出版、二〇一〇年六月、三八頁

幕末の森林資源枯渇傾向については、大友一雄「留山」（『国史大辞典』吉川弘文館、一九八〇年一月）、所三男『近世林業史の研究』（吉川弘文館、一九八〇年二月）等にも指摘がある。武井はそれを、近世後期の害獣増加の原因として

指摘している。

(5) 愛知県知多郡半田町編『半田町史』一九二六年（大正十五年）十月

例えば「第三篇 産業／第一章 農業／第三節 山林水産及農業諸機関／一 山林」の項に、「幕府の末造紀綱要の弛めるや賄賂横行、山林を巡視する小役人に至る迄悉く賄賂に由らざるはなく、其弊の波及する所林政の荒廃を招くに至れり。」（一九六頁）とある。

※以下「半田町史」よりの引用は原則として本文中に頁数を記す。

(6) 所三男「御林」（『国史大辞典』吉川弘文館、一九八〇年一月）

尾張藩では幕府直轄林を「御林」と呼び、藩の直轄林を「留山」と呼称した。（大友一雄「留山」、『国史大辞典』吉川弘文館、一九八〇年一月）

(7) 『半田町史』一九六頁

(8) 新美南吉記念館編『生誕百年 新美南吉』（新美南吉記念館、二〇一三年七月、八五頁）にもこれについて言及があるのを発見した。

(9) 大石源三『改訂版』ごんぎつねのふるさと 新美南吉の生涯 エフエー出版、一九九三年、初出一九八七年、十九頁
(10) 中山文夫『私の南吉覚書』小栗大造、二〇〇五年（自費出版）

(11) 『改訂版』ごんぎつねのふるさと 新美南吉の生涯 十九頁

(12) 『半田町史』一〇八頁

中埜氏は江戸時代初期よりの醸造家、小栗氏は古くからの

豪商（現代の子孫が新美南吉記念館の運営にもかかわっておられる）。どちらも岩滑から南方に離れた村に居住していた旨の記述が『半田町史』にある。

(13) 『国史大辞典¹³』吉川弘文館、一九九二年一月

(14) 「阿久比町」（『日本歴史地名大系²³』平凡社、一九八一年十一月）に次のようにある。

明治十一年（一八七八）の郡区町村編制法制定施行に伴い、草木・白沢・坂部・卯之山・板山・福住・稗之宮・椋原・角岡・高岡・矢口・植・大古根・横松・宮津・萩の一六村を合併し同年二月二十八日、阿久比村とした。同二年町村制施行により、阿久比村・椋岡村・矢高村・植大村で阿久比村を、白沢村・草木村・卯坂村で上阿久比村を、横松村・宮津村・萩村・板山村・福住村で東阿久比村を設けた。同三十九年三村を合併して阿久比村となり、昭和二八年（一九五三）町制を施行、阿久比町となった。

(15) 「杙」（^い）とは、「水の出入りを調節できるように池などの堤に埋めた樋（とい）や水門をいう（『日本国語大辞典』）。愛知県では、特に「杙」の字を使用することが多い

（『朝日新聞』名古屋版、七月二日夕刊）。

(16) 『日本国語大辞典¹⁰』（第二版）小学館、二〇〇一年九月

(17) 例えば『愛知県史 別編 民俗2尾張』（愛知県史編さん委員会、二〇〇八年三月）には「多くの農家では、川で魚を捕るのは秋から冬にかけてのことで、（中略）楽しみでやった。川や用水、池はムラ共同の管理が多く、（中略）川で漁をするにはウンジョウ（運上金）をムラに出していた。」とある。